

ミョウガ

札幌市医師会
谷村医院サンクリニック

谷村 章子

秋の訪れを感じる9月、我が家のミョウガ畑はそろそろ今年の収穫も終わりです。

ミョウガといえば、夏の薬味の定番。冷奴に、素麺に、時には甘酢漬けにして箸休めとして食されることが多い日本人には馴染みの野菜です。

数年前の春先、ホームセンターへ玄関前を彩るプランターの花苗を買いに出かけた私は、ふと家庭菜園コーナーで土からニョキっとボールペンが飛び出ただけのような苗に目が留まりました。「ミョウガ198円」の札を見て「スーパーだと3個198円だから、とりあえず3個収穫できれば御の字だわ!」と1本だけ苗を購入。無頓着な私は栽培法について情報収集もしないまま隣家に接する日当たりの悪い地面に苗を植えてはみたものの、夏の間全く水やりもせずに放置。秋までに草丈は30cm程度、茎は親指くらいの太さにまで成長しただけでミョウガの姿はどこにもなく、いつしか雪に埋もれてしまいました。

「やっぱり、ミョウガはスーパーで買うしかないわ」と学習して迎えた翌春、ふと気付くと雪解け地面から見覚えのある細長い茎がニョキニョキと何本も突き出ていました。調べるとミョウガは多年草。しかも食用部分は地下茎から伸びた花穂だということを知り、2年目の秋には地面に這いつくばるようにして目を凝らし、土の表面を手探りで探した結果、なんと、ポコポコと土の中から顔を出しているミョウガの子を発見!

初収穫は50個程度だったものの、以後数年で我が家のミョウガは年を追うごとに隣家との間の地面を覆いつくすほどに成長し、今では毎年200個前後の収穫ができるようになりました。一昨年秋、ミョウガの甘酢漬けがあまりにもアントシアニンの色鮮やかに完成したため「198円の苗1本から今年も豊作!」と名付けた写真をグループLINEにアップしたところ、「その多産系ミョウガ娘をぜひ我が家にも」と希望する友人が続出。「地上に芽を出したばかりの細い茎なら簡単に引っっこ抜けるだろうから春に送るね」と返信し、5月、いざ我が家のミョウガ娘を友人宅に嫁に出そうと茎を引っ張り上げてみたものの、毎年たくさんミョウガの子を産出してくれた親苗の生命力はすさまじく、縦横無尽に張り巡らされていた地下茎の強さに四苦八苦。あらんかぎりの力でなんとか茎を引っ張り上げると、バリバリと音を立ててなんとか地下茎ごと引き抜くことに成功し、「あちらのお宅でもたくさん子供を産んでね」と声をかけ、我が家のミョウガ娘たちを友人宅6軒へ送り出しました。来年以降、友人たちからどんなミョウガの孫誕生報告が届くか今から楽しみです。

10条ギャラリー

札幌市医師会
勤医協伏古10条クリニック

小泉 茂樹

私たちの仕事場、伏古10条クリニックは東区の札幌新道沿いにある内科診療所である。ここで15年前から写真を飾るようになった。受付、検査室のある1階の3カ所にほぼ3カ月に一度写真を入れ替えて飾っているのですが、これまで180枚近くの数になる。写真は当初カメラ店に頼んだワイド4つ切りプリントだったが、デジタルカメラとプリンターの精度が良くなってからは、自前のプリンターで印刷し、最近はA3サイズで額も大きく軽いものに変えた。被写体は自然の風景、野花、野鳥、野生動物なので、山野、海辺などを歩くことが増え、健康維持にも役立っているように思う。

写真は患者さんの見やすい場所に展示されており、これを楽しみにしている患者さんも多い。これまでで特に人気があったのはエゾフクロウの写真で、これまで何度か展示している。フクロウ愛好家も多いようで、診察室でフクロウの話に花が咲くこともある。気に入った写真はポストカード風にしてお渡ししているが、次の写真を心待ちにしている患者さん、家族もいる。ハクチョウの写真も何度か展示したが、ある患者さんは引き延ばしたハクチョウの写真を自宅の天井に貼って寝ながらいつも眺めていると話していた。その方は不治の病で亡くなり、家族がお棺の中に写真を入れて見送ったという。

ホスピタルアートとして、芸術作品を医療施設内に展示する試みが行われるようになった。病院・クリニックは患者さんの医療を行う場であり、癒しの場でもある。展示作品が患者さんの心に届く癒しの力を与えているとしたら、意義のある試みであろう。当クリニックでは、やはり15年ほど前から音楽コンサート（平和コンサート）を定期的に行っている。これもホスピタルアートといえるだろう。

3カ月ごとのギャラリー展示に向けて、これから素晴らしい自然のショットを追求したいと思う。

